

さくら通信 No.7

修行ということ…作務 働く

合掌

先日、ある拳士が土曜日に練習したいというので、土曜の朝、道場を開けておきました。来るという時間になって道場に行ってみると、D拳士とY拳士が、道場を雑巾がけしていました。普段は、床のマットだけの雑巾がけですが、その時は靴箱や棚の下など、普段手の届かないところまで丁寧にやってくれていました。素晴らしいですね。決められた修練の時以外の、自主的な修練においてもしっかりと作務を行うことができる。こういう心掛けが大切なのだと思います。作務は単なる掃除として、決められているからやるものではありません。宗門の行としての少林寺拳法の修行の一環として行っているのです。

今から1200年ほど前に、中国に百丈(ひゃくじょう)禅師という方がおりました。百丈禅師は80才になっても作務を続けていたそうです。さすがに弟子たちが、もう作務などなさらなくて静養するように勧めたそうですが、やめません。そこで、弟子たちは、作務の道具を隠してしまったそうです。すると、百丈禅師は、部屋で坐禅を組んで、食事を3日もとらなかったそうです。弟子たちが、なぜそうするのかと尋ねると「一日不作 一日不食(1日作(な)さざれば、1日食らわず)」と言われたそうです。反省した弟子たちが道具を差し出すと、百丈禅師はさっそく作務を始め、食事もとったということです。これは、「働かざる者食うべからず」ということではなく、働くということ、つまり作務ということが、修行するうえでいかに大切かということをも百丈禅師は身をもって示したのです。

決められたからやるのではなく、作務をどう取り組むかということも大切なことです。どのようにすればきれいになるか、掃除するところはないかと考えて行うことは、日頃の生活において、周りのことに気遣いの出来る態度を自然と養います。また、修練の場として使っている道場に感謝の気持ちを持って行うということも、日頃の生活の中で、様々なことに感謝しながら生活することにもつながります。そうした態度で作務ができていくかどうかを自分に問いかけながら行うこと、これは即ち自己の在り方を常に問う「脚下照顧」の実践です。

「働く」ということについて、もう少し考えてみましょう。以前、話したこともあると思いますが、「働く」ということは「傍(はた)」を「楽(らく)」にすることです。みんなで仕事をしているときに、誰かがサボれば、その分を他の誰かが補って行わなければなりません。しかし、各人が、それぞれ、しっかり働けば、その分、作業も早く進むし、楽に終わります。他の人のために働けば、勿論その人は助かりますし、きっと感謝してくれるでしょう。人から感謝されることはうれしいものです。つまり、一生懸命に働くということは、自分を見つめなおし、自分を高めることであると同時に、他の人から感謝されたり、尊敬されたりするという、一石二鳥どころか、三鳥も四鳥もあるのです。「働く」ことは、自己を高めていくこと、それは自分の為であり、結果として他の人の為でもある。まさに「自己確立」と「自他共楽」の実践なのです。

「働く」ことができることを、有難いと感謝しながら、日々の務めを作(な)すことに励んでいけることは幸せなことです。

結手

連絡事項

1 達磨祭の実施日の訂正について

達磨祭の日程に間違いがありました。下記のように訂正をお願いいたします。

(1)日 時 10月18日(日) → 18日(土)